

# 嘉祥大師吉蔵の中道為正因仏性論

金 仁 徳

## I 序 言

嘉祥大師吉蔵（五四九—六二三）は周知の如く隋代の三大（或は四大）碩学の一人として五十余部百八十余巻を撰述（現在二十六部百十巻）して中国仏教の第一著作家として尊ばれ、僧朗（高句麗分身五C末—六C初）僧註（生没未詳）法朗（五〇七—五八二）と継がれる（撰賛相承）学説に基づいて中国三論学を集大成した人である。

彼は博學広識・博搜広引であつたと評価されるように大乘関係の教学のみならず、部派や原始の仏教歴史と教理内容に関連される諸般問題を該博に扱っていた。しかも常に彼は徹底して「中道・縁起・無性・空性」という仏教の根本精神と真理性に立脚し、その諸般問題を解明した特徴がみえる。

一切衆生を成仏させて涅槃を証得せしめるという仏教窮極目標の実現の可能性である「仏性」についておおよそ次の如く論じている。

すなわち吉蔵は『大乘玄論』巻第三の「仏性義十門」において、当時まで中国仏教界の諸家が盛んに論議し、主張した仏性説の多様な内容等をみな検討・批判した後に、平等不二の「中道」のみが成仏を可能ならしめる真正なる要因になるという「中道為正因仏性論」を展開する。さらに無情生物である山川草木も成仏することができるという

「草木成仏論」までも開陳している。

本小論は、吉蔵が「非真非俗の中道が正因仏性になる」といい、また「非因非果の中道こそ正因仏性になる」といい、さらに「体用平等不二の中道がまさに仏性である」といい、或は「有無内外平等不二こそが正因仏性になる」等の如く、「中道が正因仏性になること」を主張した論理展開と、その根拠について考察してみようとするのである。

## Ⅱ 当時の諸仏性説批判

五世紀初に「一切衆生悉有仏性」を説いた『涅槃經』の一部（『大般泥洹經』六卷）が法顯と覺賢（*Buddhabhadra* 三五九—四二九）によって訳出（四一八）されて以来、道生（四三四卒）が「頓悟成仏論」とか「闡提成仏」を主張したことなどで、中国仏教界には「仏性」に対する問題が大きく浮刻された。

さらに、中天竺人の曇無讖（*Dharmarśa* 三九七—四三三）によって『涅槃經』全分すなわち『大般涅槃經』四十卷（北本）が伝訳され、上述の六卷本とこの四十卷本の『涅槃經』を対校し、再編集した三十六卷本『涅槃經』（南本）が慧嚴（三六四—四四三）と慧観（四五三卒）および謝靈雲（三八五—四三三）等によって完成された。さらに、その後には江南の建康を中心としてこの『涅槃經』に対する盛んな研究と講經・注釈がなされ、一大学系（涅槃宗）が形成されるに至った。また梁代には武帝の勅命により涅槃学者の学説を集大成した『大般涅槃經集解』七十一巻が撰述された。

是の如く「一切衆生悉有仏性」を説く『涅槃經』に対する研究が活発に行われただけに、「仏性」そのものについても非常に真摯なる研究と理解が要求され、衆生・心・真神・阿黎耶識・自性・清淨心・第一義空などと結びつけての内容を説明しようとする仏性説が多様に展開された。

吉蔵は『涅槃經』伝訳以後から隋代までのかかる多様にして紛々した仏性説の中で代表的な十一家の学説を選び出

し、果してこれらが成仏の正因として仏性を正しく説明しているかの如否を検討して、その一一を個別的に批判したり、また総括的に結んで「三重破」として論破した後「中道」や「第一義空」こそ成仏の真正な要因、すなわち「正因仏性」になるということができると主張したのである。

## 1 個別的批判

『大乘玄論』巻第三「仏性義十門」において、吉蔵は当時まで伝来されてきた仏性説の中で特徴のみえる十一家の主張、すなわち衆生が正因仏性になるという「衆生為正因仏性説」をはじめとして、六法・冥伝不朽・避苦求楽・真神・阿黎耶識・当果・得仏之理・第一義空などが正因仏性になると主張した学説をあげて、一一に検討批判している。彼は誰の学説であつたかその名前を明かさずに批判しているが、元曉の『涅槃經宗要』や安慧の『四論玄義』と吉蔵の著書、または現代学者達の研究結果等を参考して、その主張者と共に十一家の学説内容を紹介し、吉蔵の批判内容を探ってみるとおおよそ次の如くである。

### (1) 衆生為正因仏性説

『涅槃經』師子吼品の「正因者 謂諸衆生緣因者 謂六波羅蜜」と、「一切衆生悉有仏性」という教説に基づいて「衆生」が正因仏性になると主張する見解であるが、これは莊嚴寺僧旻(四六七―五二七)と招提寺白琰等の学説であるのが分る。

かかる見解に対して吉蔵は『金剛般若経』の「若し菩薩に我相・人相・衆生相があるとすれば菩薩ではない」という教説に基づいて、「衆生をどうして正因といえるか、……衆生相があればみな妄想であるのに、なぜ妄想顛倒を正因になるといえるのか、」と批判し、さらに「若し衆生をそのまま仏性というならば、一切衆生悉有衆生であり、一切仏性悉有仏性であるともいえる矛盾が生じるのではないか。……従つて衆生と仏性は異なるものであり、衆生を仏性

とはいわれない。」と批判している。<sup>(4)</sup>

(2) 六法為正因仏性説

『涅槃經』迦葉品の「不即六法 不離六法」と説いていることに基づいて、五陰と仮人の「六法」を正因仏性と考えた主張であるが、これは定林寺僧柔法師等の学説であると指摘されているものである。<sup>(5)</sup>

これについて吉蔵は經説の内容を正しく理解してないための過ちであることを指摘する。すなわち「經に、不即六法・不離六法というのは、六法と相即もせず六法と相離もしないことをいうのであり、どこに六法そのものを仏性であると示しているのか」と論破している。<sup>(6)</sup>

(3) 心為正因仏性説

『涅槃經』師子吼菩薩品に説く「凡有心者は必定当得無上菩提する」という内容によって、心識があることは無情之物である木石などとは異なり、研習を通じて必ず成仏できるといふ見地から「心」を正因仏性と考えた学説である。これは開善寺智蔵(四五八―五二二)が「正因者心也。凡有心者皆当作仏故 心為正因 緣因者即十二因縁……」と主張し、<sup>(7)</sup>さらに数論学者達が「有心神必有仏之理 故心神為本 不同草木尽在一化」と考えた学説である。<sup>(8)</sup>

吉蔵は、かかる学説に対してその経句は、「心がある人は必ず悟ることができることを明かしたのみであり、どこに心そのものを正因仏性になるといったのか」と反論して、むしろその経句には「心は無常であり、仏性は恒常である」と續けて説いていることを忘れてはならないときとしている。<sup>(9)</sup>

(4) 冥伝不朽為正因仏性

神識には「冥伝不朽」の特性があるとみ、すなわち心識の根底に永遠に不朽する特性があるとみて、これが仏性の正因になると確定した学説であるが、これは中寺の小安法師(または法安)の見解であらうと指摘されたり、或は撰論<sup>(10)</sup>

家が本識の中の解性を仏性になるといふ見解をさしていると把握されてもいる。<sup>(11)</sup>

前述の第三家(3)が「心」を正因仏性になると主張した「心為正因仏性説」が不当であるから、その心家の体用説にすぎない第四家の「冥伝不朽」も、第五家の「避苦求楽」も、さらにその真偽説にすぎない第六家の「真神」も、第七家の「阿黎耶識自性清浄心」なども正因仏性ということとはできないと、吉蔵は一括的に批判した。さらにその第四家の学説に対して、経文のどこに「冥伝不朽」が正因仏性になると説いているか、と彼は反問詰難している。

(5) 避苦求楽為正因仏性説

『勝鬘經』の「若無如来藏者 不得厭苦求涅槃」という教説に基づいて、苦を避けて楽を求める心、すなわち「避苦求楽」する心の作用を仏性の正因になると考えた学説であるが、これは光宅寺法雲(四六七―五二九)、と靈味淳師の主張であつたことが分る。<sup>(13)</sup>

かかる主張は心家の体用説にすぎなく、仏性の正因を正しく説明していないと、すでに前で吉蔵が一括的に批判したのである。さらに彼は『勝鬘經』のその経句が「如来藏仏性の力で衆生が厭苦求楽できることを示したのみであつて、なぜ厭苦求楽そのものを正因仏性と説いているのか」といひ、その見解を批判している。<sup>(14)</sup>

(6) 真神為正因仏性論

「若し真神がなければ如何にして真仏を成すことができるか。」という眼目から、「真神」すなわち心識上の神我を正因仏性になると考えた学説である。これは梁武帝の主張であるといつたり、<sup>(15)</sup>靈味高の学説であらうともいわれる。<sup>(16)</sup>この主張についても、すでに一括的に批判した如くである。

(7) 阿黎耶識自性清浄心為正因仏性説

阿黎耶識と自性清浄心を仏性の正因とみなす学説であるが、これは地論師と撰論師等の見解に属するものと見立て

られている<sup>(17)</sup>。

この学説についてもすでに批判した所であるが、さらに吉蔵は「これ（阿黎耶識）は無明の母であり、生死の根本である」と説いている『撰大乘論』の文を引用して、「六識と七識ないし百千無量識であつてもみな有所得の学説であり、五眼を以て見られないので仏性ではない<sup>(18)</sup>」と敷衍批判している。

(8) 当果為正因仏性説

万行の修行を通じて当然得られる結果（当果）を正因仏性と考えた学説である。これは白馬寺愛法師が道生の仏性義を祖述したものであると知られ<sup>(19)</sup>、南北朝の当時の諸師等はほとんどが仏性をかく把握した（古旧諸師多用此義）と吉蔵が紹介したりもする学説である。

これに対して彼は「これは始有義として、若し始有（無いものが新たに存在すること）であるならば、作法（操作されたもの）にすぎなく無常なるものであり、仏性ということはできない<sup>(20)</sup>」という内容で批判している。

(9) 得仏之理為正因仏性説

一切衆生には本来から「成仏せしめる真理性（原理・理致）」、すなわち「得仏之理」が備わっているという立場において、この得仏の理」を仏性の正因になると主張した学説である。

吉蔵は、この主張を靈根寺慧令僧正の学説であるといい、最も勝れてはいるが、師資相伝がないと指摘して「何の経にこれが示されているか」と、また「誰から教わったのか。師は心を正因仏性としているのに弟子が得仏之理を仏性とすれば、師を裏切つて自作したのではないか。」とも批判している<sup>(21)</sup>。

(10) 真諦為正因仏性説

真諦が仏性の正因になると主張する学説である。吉蔵は和法師と小亮法師<sup>(22)</sup>、すなわち靈味寺宝亮（四四四—五〇九）

の学説であるが、やはり承習と経証が確かでない（無有師資 亦無証句）と批判している。

#### (1) 第一義空為正因仏性説

『涅槃經』師子吼品に「仏性者、名第一義空」を仏性の正因とする学説であるが、吉蔵は北地の大乘学者の学説（北地摩訶衍師所用）であると言及しているのみである。現代学者等は北地の古三論家の学説であつたか、または地論家の学説であると推定したり、或はそのいずれとも確定しがたい問題があつて北地流行の『大智度論』研究者をも考慮せねばならぬ<sup>(26)</sup>という説明をしている。

「第一義空」を仏性の正因になると主張した学説を批判した内容においても、吉蔵の「中道」が正因仏性になることを主張しているのが示される。すなわち彼は『涅槃經』によつて第一義空が仏性になるとするが、その経文の内容によると空ではなく、中道を以て仏性としていたことが分かる」と主張したのである。

以上の如く、吉蔵は『涅槃經』伝訳以来に展開された多様な仏性説すべてを調査して、その中で特徴のみえる十一家の学説を正出し、一一に検討批判した後に中道こそ正しい仏性になることができるという「中道為正因仏性論」を新たに主張したのである。これは淨影寺慧遠（五三三—五九二）<sup>(26)</sup>と天台智顗（五三八—五九七）さらに賢首法蔵（六四三—七二二）など当代碩学の誰もいかなかったことである。従つて、吉蔵により一切衆生を成仏せしめるという仏教究極的目標に向う実践の可能性として「仏性」は中道正法という仏教根本要諦に還源され、また諸仏性説はそれによつて浄化並びに深化されていくといえるであらう。

#### 2 総括的批判（三重破）

吉蔵は上述の如く『涅槃經』伝訳以後、当時までの諸仏性説の中で十一家の主張を正出して個別的に一つ一つを批判してから、十一家の説を内容別に分類整理して総括的に論破（三重破）してもいる。

すなわち彼は、上の十一家の説を「仮実二義」と「心識」および「得仏之理」との三つの意味内容に基づいた主張にすぎないと評価分類し、十一家の説すべては「得仏之理」すなわち「成仏せしめる原理（真理・理致）」を追求することには共通するという観点に於て、それら全部をこの「得仏之理」に一括して、三つの側面から検討批判する「三重破」を以て総括論破したのである。<sup>(28)</sup>

先ず彼が十一家の説を三つの意味内容に評価分類したのを取意要約すると次の如くである。

第一家が説いている「衆生」は仮名仮人であり、第二家の説く「六法」も五陰と仮人であるので、これらは「仮実二義」に立脚した主張にすぎない。<sup>(29)</sup>

その次に第三家から第七家に至る五家の仏性説は、第三家説である「心」という一つのもと（本体的特性）から起こってくる作用的特性（第四家説の冥伝不朽、第五家説の避苦求樂）であり、さらに心を真性（第六家説の真神）と偽性（第七家説の阿黎耶識）とに分けて主張した学説であるので、つまりこれらすべては一つの「心識」から仏性の正因を求めようとした見解にすぎない。<sup>(30)</sup>

残った四家の仏性説はともに「理」すなわち真理性（原理・理致）が正因仏性になると主張したものである。第八家の説く「当果」と第九家の説く「得仏之理」は、彼等自身がいうように世諦之理に該当し、第十家説の「真諦」と第十一家説の「第一義空」は真諦之理の故である。<sup>(31)</sup>

是の如く、古来相伝の十一家説を仮実・心識・得仏之理の三つの内容に分類整理した吉蔵は、最後の四家説が仏性の正因になると主張する「得仏之理」に諸仏性説が共通するという立場から、十一家説をこれに結びつけて三つの側面から検討批判した。これがいわゆる「三重破」である。

三重破とは、「作有無破」と「作三時破」及び「作即離破」との三つの批判であるが、これは上述の「得仏之理」



すなわち「成仏せしめる真理性(原理・理致)」に対して、先ず(第一重)有・無に思惟判定されるものかの如否、次に(第二重)過・現・未の三時中に作用するものかという如否、最後に(第三重)大乘理念である空思想と同異するかという如否など三つの側面(三条)から検討して、結局は成仏せしめる正因になるといえないことを示したのである。

(1) 作有無破(第一重破)とは、その「得仏之理」が「ある」とか「ない」というように判定できないのであることを明かして、成仏せしめる正因とはいえないことを指摘するのである。すなわち吉蔵はその「得仏之理」を「ある」とするか、それとも「ない」とするかを反問し、

若し「ある」とすれば、それはすでに成事(成仏)せられたことになるから、さらに成仏せしめる真理とはいえないく、若し「ない」というならば、その真理はないことになる。かかる二辺(有と無)に陥るものは真理(得仏之理)ということはできない。<sup>(32)</sup>

と論難している。有・無のような二辺両極と四句思惟の判断は原始仏教と大乘仏教では徹底的に排撃するものであることはいうまでもなく、特に三論学においては四句思惟と百非も否定超越(絶四句・超百非)するように教えていることは周知の事実である。

従って吉蔵は第一重の「作有無破」を通して、その「得仏之理」が「ある」とも「ない」とも判定されないものと示し、さらにかく判定されるにしても有・無の二辺両極に偏墮するので、正しい真理性といえないことを指摘している。

(2) 作三時破(第二重破)とは、その「得仏之理」が過去・現在・未来の三時の中で、いずれにも存在しないことを示して、それが成仏せしめる真正な要因にならないことを次の如く論難する。

### 第二作三時破

只問 得仏之理 為是己理 為是未理 為是理時有理 若言己理 則理已不用 無復有理 若言未理 未理故未有

若言理時有理者 若法已成則是已 若法未有則墮未 故無別第三法稱為理也。<sup>(33)</sup>

若し「得仏之理」が過去に存在するのであれば、すでに過ぎ去った真理として、殊更に成仏せしめる作用がないので「成仏せしめる真理」ではない。また若し未来に存在するというならば現在、そして現実とは何等の関係もないものになってしまう。それが現在に存在すると考えられるにしても成仏せしめる瞬間はすでに過ぎ去った過去のこととなり、さらに瞬間ではあるがまだ作用しないのは未来に属することになる。故に過去と未来とに分れるものが、なぜ第三の現在に存在しながら成仏せしめる作用をするといえるのか、と批判したのである。ここでは『中論』觀去來品第二に「去」を論破した「不去」の論理が応用されている。

(3) 作即離破(第三重破)とは、大乘根本精神である空思想と相即するか、それとも相離するかを検討して、その「得仏之理」が仏性の正因になれないことを明かそうとして次の如く論破している。

### 第三即離破

只問 得仏之理 為当即空 為当離空 若言即空者 即早已是空 無復有理 若言離空有此理者 空不可離 豈得離空而言有理 又觀空而有理者 則成二見 經云 諸有二者 無道無果 豈可以二見顛倒為正因耶。

大乘力説の空思想は仏教根本の精神であり、理念である。「得仏之理」をこれと對比させ若し相即(同一)すれば「空」にはかならずなく、別の「得仏之理」がありえない。反対に若し相離(相異)するものというならば、空思想から離れた真理を認める誤謬が生じ、また空思想と得仏之理との二つを共に認める二見に陥って修行(道)も得果(果)も得られない顛倒妄想になる。従って「得仏之理」は成仏せしめる正因になることはできないと、吉蔵は指摘論難したのである。

以上の如く、「三重破」を以て「得仏之理」が如何にしても成仏の真正な要因になれないことを明らかにした吉蔵

は、前述の第八・九・十・十一家の仏性説がこれを以てみな破れられたのみならず、十一家説のいずれも自ずから破碎されると附言している。<sup>(36)</sup> かかる点において彼は従来の諸仏性説すべてを批判したことになる。

### III 正因仏性論議検討

『涅槃經』伝訳以来、中国仏教界においてとても熱々に論議された多様な仏性説の中から十一家説を代表的に選び出し、前述の如く個別的にかつ總括的に検討してみても、成仏せしめる真正な要因（正因仏性）になるべきものはないと指摘論難した吉蔵自身は、何を以てその真正な要因（正因）になると主張し、さらにこれを如何に論証・説明しているのだろうか。

『大乘玄論』卷三の「仏性義十門」において、吉蔵は「対他」と「望道」との両面から上述の十一家の仏性説を論議する「横豎両重論」を展開（明異釈門 第二）したり、または『涅槃經』師子吼菩薩品の教説の一部である四句（因・因因・果・果果）を「然始終検」と「有始終検」との二つの側面から検討（簡正因 第四）することを通して、仏教の根本要諦である「中道」こそ成仏せしめる真正な要因の「正因仏性」になるといえることを明らかにしている。

#### 1 横豎両重論議による正因義

仏性義十門の「明異釈門 第二」において吉蔵は「横破八迷」し、「豎窮五句」する三論学の特有な考察方法<sup>(36)</sup>を応用して、成仏せしめる正因の内容を「対他」の横的側面と「望道」の縦的側面から論議説明している。すなわち「明異釈門」末尾において「前のものは横論一重であり、これは豎論一重であるので正因義が両重に論ぜられた」<sup>(37)</sup>と結んでいる故に、我々はこの両重論の内容を検討してみると、吉蔵が何を以て正因仏性としているか、を分かるようになるであろう。

## (1) 横論 一重

『中論』劈頭の「八不偈」に生滅・斷常等の八迷の各々を次第に破斥（横破八迷）してその反対内容である「不生不滅・不斷不常」等を宣説しているように、吉蔵は前述の十一家の仏性説を対象（對他）として以藥治病のために、その各々を否定する反対の内容から正因仏性を次の如く示している。

問う、他家説を破斥すると今（私）は何を以て正因になるというのか。

答う一往は對他するのであるが、そのすべては反対になる。彼等が悉有というならば私は「皆無」という、彼らが衆生を正因になるといえば私は「非衆生」を正因とする。彼等が六法を正因とすれば私は「非六法」を正因とする。及び真諦を正因とするならば私は「非真諦」を正因にし、若し俗諦を正因とすると私は「非俗諦を正因にする。

従つて「非真非俗である中道」が正因仏性になるというのである。藥を以て治病のために斯く説明するのは、もつぱら對他である。<sup>(38)</sup>

と説明する内容において、吉蔵はいちおう對他して以藥治病するという立場から、他家説と正反対になる内容を以て正因仏性を説明せんとしているのが分かる。「悉有」を主張する他家説を相手にして「皆無」を主張した点において、彼が如何に無我・皆空・縁起の仏教基本精神に充実しているかを窺える。さらに衆生と六法および真諦と俗諦などを正因にした古來相伝の仏性説を対象として、非衆生・非六法・非真諦・非俗諦を正因とし、しかも非真非俗の中道が正因仏性になると主張した内容からみて、吉蔵は二辺兩極を遠離する真理性すなわち正法中道を真正なる成仏の要因である正因仏性になると主張したことが分かる。

## (2) 豎論 一重

吉蔵は「堅論一重」において、「對他治病」のためではなく、絶対の眞理性を望む「望道」の立場から正因仏性を明らかにしようとする。有・無・亦有亦無・非有非無等の四句（五句）思惟を超越した言亡慮絶の絶対的眞理が、成仏せしめる眞正要因になると主張せんとしたのである。

前述の「横論一重」においては、『中論』八不偈の横破八迷する論旨に基づき、他家説の正因義の各々に対する横線的否定を通して示される相反的な内容の非衆生と非六法および非眞非俗であるものを正因仏性になると論議したが、この「堅論一重」においては、他家説の正因義の一つ一つを垂直的に、すなをち縦（豎）的に深く考察し、その各々から正因仏性を探ろうとする。前者が「横破八迷」する『中論』八不偈の「破邪」と「超百非」の精神から成り立っているとすれば、後者は「堅窮五句」とも「絶四句」または「顕正」するという立場からの論議であるとみることができよう。

「堅論一重」では「望道」という構えを以て堅窮五句し、絶四句の境地で正因を求めようとするので、他家の仏性説に対する一次的否定を通して得られる反対内容を正因とする場合とは異なり、衆生を「非衆生」といい、六法を「非六法」と主張するその一一の内容から言亡慮絶の眞理性を見付け出して、これを正因義とせんとしたのである。従つて、吉蔵はこの非衆生の内容は浅くて、しかも深い（此非衆生 有淺有深）と前提しながら、次の如く正因仏性を示している。

又須横堅論之 故此非衆生義 有淺有深 横論為棄 則如向弁 堅則望道。只非衆生 等即是正因 若言是是非是 亦何者非衆生 而説衆生乎。但非衆生而説衆生 此之衆生 豈可言是有 豈可言是無 豈可言其是亦有亦無 非有非無耶。若識此衆生者 何為問非正因 乃至六法眞諦亦如此 若徹了深悟 此則正因仏性義已具足。<sup>(39)</sup>

横論一重においての如く、「唯だ衆生・六法などが批判否定されて非衆生・非六法などを正因になるとし、若し是

（衆生）と非是（非衆生）に區別すれば、何をもって非衆生でありながら衆生であるものといえるか」という説明を通して、吉藏は單純に否定とか是・非是の區別で得られる「非衆生」などは對治のための棄になるのみで「望道」する深い内容はないが、「非是でありながら是であるもの」すなわち「非衆生でありながら衆生であるもの」には深い内容が備わっていることを提示した。

そこで彼は「非衆生であり、しかも衆生であるものといわれる衆生は、有とも無とも亦有亦無とも非有非無ともいえないものであること」を明かし、さらに四句思惟を超越する「かかる衆生を認めるならば、なぜそれを正因でない」と問責できるか、他の六法と真諦も同じである」といい、「若し深く悟ると、これら（衆生等）にはすでに正因仏性義が具足されたはずである」と主張した。

諸法無我と衆縁和合、また一切皆空を教える仏教根本教説に照らして見ると、衆生これは「非衆生」でなければならぬ。斯く「非衆生でありながら衆生であるもの」を有・無・亦有亦無・非有非無など四句思惟を以て斷定できないと指摘することによって、彼は四句（五句）の思惟判斷を超越した言亡慮絶の絶対的眞理性（諸法実相<sup>(40)</sup>）に立脚して、成仏せしめる眞正な要因として「正因仏性」を糾明せんとしたのが示されている。

さらに「かかる衆生を知り、深く悟ればそれこそ正因になる」といい、「他の十一家説の六法と真諦・俗諦なども同じく正因仏性になる」と言及し、吉藏は是是非非等の一切差別妄想を超越した境地、すなわち心行処滅であり、言語道斷な絶対的眞理性において、正因仏性を見出そうとしたのみならず、諸法平等と無二・無差別なる絶対的境地に立ち、差別の特殊世界を認める立場を以て十一家説の正因義すべてを肯定<sup>(41)</sup>もしている。

## 2 無始終・有始終の兩種検討による正因義

成仏して涅槃を証得せしめる眞正な要因として「正因仏性」を明かさんとして、吉藏は三論家が伝統的に好んで経

証としている『涅槃經』師子吼菩薩品の仏性に關する教説一部の内容に基づいて、正因仏性を検出するために無始終檢（作車輪明義）と有始終檢（作三世明義）の二つの側面から検討していることが『大乘玄論』卷三、仏性義十門の「簡正因、第四」において明らかにされる。

それでは、その『涅槃經』の教説内容は如何なるものであり、吉藏は兩種検討を通して正因仏性を如何に明しているか。

仏性を成仏せしめる「可能性」であるというならば、その仏性は成仏せしめる「原因」であり、成仏はこの仏性によつて遂げられた「結果」である。さらに「仏性」は「成仏」という結果を生ぜしめる要因であるから、その結果と何等の關係もない別個の原因ではない。『涅槃經』師子吼品（南・北本共に）においては「仏性」のかかる屬性（因果關係）を十二因縁と結び付けて、次の如く教説している。

①善男子 是觀十二因縁智慧 即是阿耨多羅三藐三菩提種子。以是義故 十二因縁名為仏性……

②善男子 仏性者 有因有因因 有果有果果 有因者即十二因縁 因因者即是智慧 有果者即是阿耨多羅三藐三菩提 果果者即是無上大涅槃。

③善男子 譬如無明為因諸行為果 行因識果 以是義故 彼無明体亦因亦因因 識亦果亦果果 仏性者亦爾。

④善男子 以是義故 十二因縁出不滅 不常不斷 非一非二 不來不去 非因非果。

⑤善男子 是因非果 如仏性 是果非因 如大涅槃 是因是果 如十二因縁所生之法 非因非果名為仏性 非因果故常恒無變。<sup>(4)</sup>

この教説内容を要約すると、「①十二因縁が菩提種子である故に仏性である。②仏性には因・因因・果・果果があるが、因は十二因縁、因因は智慧（觀智）、果は三菩提、果果は大涅槃である。③ちょうど無明が因になり、行が果に

なる。さらに因が因になり、識が果になるように無明そのものは因にも、因因にもなり、また識は果にも果果にもなる。仏性は是の如くである。④従って十二因縁は不出不滅であり、及び非因非果である。⑤非因非果こそ仏性ということができ、非因果であるから恒常であり、無変である」等と整理できる。

吉蔵は、かかる師子吼菩薩品の教説に基づいて分かり難い正因仏性を明かすために、次の如く無始終検と有始終検との二つの検討を展開しているのである。<sup>(43)</sup>

(1) 無始終検（作車輪明義）

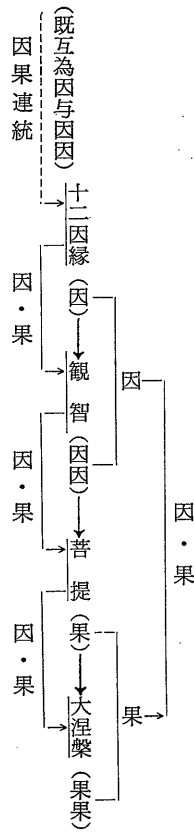
上述の師子吼菩薩品の教説中で②に、仏性には因と因因、さらに果と果果の四つの属性が含まれているというが、果してこれらに正因仏性というべきものがあるか否かの如否を如何に検討してみても、無限廻転する車輪のように連続反復する因果関係の「因」と「果」があるのみで、この因と果を越える非因非果であるもの、すなわち「中道」こそ正因仏性であるということを明らかにせんとしたのが「無始終検」であり、「作車輪明義」である。

宇宙人生に一貫する法則性の縁起（十二因縁）の真理を正しく觀察認識（智慧）して、悟り（菩提）を成し、涅槃を証得するということは初転法輪以来の仏教究極の目標である。この目標を実現し、成就せしめる可能性が仏性である。従って、上述の師子吼菩薩品の教説②では、この仏性を原因と結果の属性別に区分して、仏性には因（十二因縁・縁起）と因因（観智・智慧）、さらに果（菩提・覚）と果果（大涅槃）との四つの内容になると説いたのである。吉蔵はかかる仏性の四つの属性を因・因因・果・果果の四句に分けて、<sup>(44)</sup>車輪のように無始終に廻転する軌道線上にあげておき、成仏を可能ならしめる真正な要因として正因仏性を検出せんとしたのである。<sup>(45)</sup>

しかし、如何に検出してみても無始終に連続反復する「因」と「果」のみで、「正因」は見えなかった。いいかえれば、十二因縁という「因」（境界因）を因由して観智という「因因」（縁因）が生じ、<sup>(46)</sup>これらの原因によって成り立つ結



果として菩提という「果」が生じ、さらにこの菩提によって成り立つもう一つの結果として大涅槃という「果果」が生じるので、つまり因（原因）と結果（果）という要素の連続する反復現象だけが無始終に起こるのみであった。<sup>(47)</sup> さらに、この連続現象の始初原因の「十二因縁」そのものを検討してみても、十二支の各項もやはり因と因因、また果と果果という連続現象の「因」と「果」のみであって、正因仏性というべきものはみることができないといった。<sup>(48)</sup> かかる「無始終検」の内容は次の如く図示化できよう。



是の如く分析検討した吉蔵は、何故にこれら四句が正因仏性になれないと判定したのであり、如何なるものを成仏の真正な要因になると主張したのであろうか。

彼は「四句所明の因・果は直接的な原因と結果になれない傍因・傍果にすぎなく、かかる因果ではない非因非果こそ正因になる」といい、「四句に第五句が備わってこそはじめて正因になる」と主張している。<sup>(49)</sup> 正因と正果もなれなく、辛うじて「傍因・傍果」にすぎない所以については、その「因」と「果」が互いに異なる異質的な内容を持つている故であったり、その「因」に十二因縁（因）と觀智（因因）との二つを含み、さらに「果」も菩提（果）と涅槃（果果）を有するものであるから、正しい原因としての「因」と「果」にはならない故であるという意味で説明している。<sup>(50)</sup> そこで吉蔵はこの四句に「非因非果」の第五句が備わると正因仏性ということができるといっている。

かかる主張の成立は、いうまでもなく彼が『中論』による三論学の真理観、すなわち「不生不滅」と「不来不去」のような両刀論法を用いて明らかにされる「中道実相」の真理性においてのみ成仏せしめる真正な要因（正因）を求めることができるということを示したものである。

(2) 有始終検（作三世明義）

前述の「無始終検」においては成仏の真正な要因（正因）を見出そうとして、仏性の属性を四つに分けた四句を無限回転の軌道上にあげておき、検討したとすれば、いまこの「有始終検」ではその四句を三世という範囲の中において、その正因を検出するといえよう。

吉蔵が成仏の正因を明かすために、その四句の属性を三世の範囲の中において検討した内容は『大乘玄論』巻第三、仏性義十門の「簡正因第四」に次の如く示されている。

第二作三世有始終検者 凡有三句。

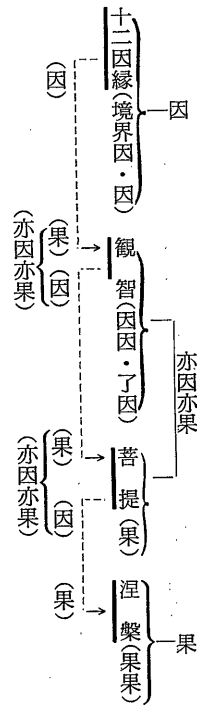
一者 是因非果 即是境界因 故經言 是因非果 如仏性。

二者 是果非因 即是果果性 故經言 是果非因名大涅槃。

三者 是因是果 即如了因及三菩提 斯即亦因亦果 望後為因 望前為果 既言境界 是因非果 涅槃是果非因 所以名為有始終<sup>(52)</sup>義。

涅槃証得の過程を因果関係の属性別に分けた四句（因・因因・果・果果）を無限定（無始終）に延長して検討せずに、その始発と進行さらに終末の三世として限定（有始終）して検討してみると、その始発点に位置する境界因（十二因縁・縁起）は最初原因として、唯だ「因」であるのみで結果ではなく（是因非果）、その終着地にある大涅槃は最終結果としての「果果性」のみで原因ではなり得ない（是果非因）。さらに、その始発と終着の両地点の間に位置する二句すなわ

ち觀智(智慧)である「因因」(緣因・三因)と菩提である「果」とは、望後すれば「因」の役割になり、望前すると「果」にもなるものであるから「亦因亦果」になるという説明である。これを図示すれば次の如くである。



是の如く「有始終検」を通して正因を見出そうとしたが、結局「因」と「果」と、さらにこの二つを肯定する「亦因亦果」があるのみである。たとえば「有・無」の両極二辺とこの二辺を肯定する「亦有亦無」のみがあり、その有・無の両極を超越する「非有非無」の真理性(中道正法)がないのと同じである。従って、吉蔵は「因・果の二辺を越えた非因非果でこそ正因になる」といい、「この三句に第四句が備わってこそ正因になる」と主張したのである。<sup>53)</sup>

#### IV 中道為正因心性論の根拠

これまで、吉蔵がその当時まで伝来されてきた諸仏性説を批判しながら「非真非俗」であり、「非因非果」である「中道」こそ真正な成仏の要因、すなわち「正因仏性」になると主張したその内容を考察してみた。

では、彼は必ずそこに基づいてそのように「中道が仏性になる」という主張をすることができたのであろうか。

『大乘玄論』巻第三、仏性義十門の「尋経門第三」において、彼は三論家が伝統的に中道を仏性としてきた根拠を

明らかにしているの、我々のかかる関心は解決される。すなわち彼は『阿含經』をはじめとする『金光明經』『華嚴經』等の諸經に仏性を説明してはいるが、一師以後の今家、三論学では伝統的に『涅槃經』を経証としていることを示しながら、<sup>(64)</sup>『涅槃經』の中でも哀歎品、如來品、迦葉品、さらに師子吼品等がいずれも仏性を広明しているが、三論家が正しいと思ひ常に用いる文句は師子吼菩薩品の教説内容であるということ指摘し、<sup>(65)</sup>次の如く中道が仏性になると主張している故である。

師子吼菩薩が世尊に「云何爲仏性 以何義故名仏性」などのように五つに仏性を問ひ、如來は次第に答えておられる。<sup>(66)</sup>

「善男子よ、仏性者名第一義空であり、第一義空名爲智慧である」と答えたことから、一応、「第一義空」が仏性になることになる。

さらに「第一義空」を智慧と名付ける」といったのは、由來義とは異ならざるを得ない。今家のみがただ「説境爲智」とし、「説智爲境」とする。

また「所謂、空といわれるのは空も不空も見ないことをいう」と説明されているが、これは智も不智も見ないことと同じく、空と不空をなくしたのである、二辺を遠離したので聖中道と名付ける。

さらに「衆生には常見と断見の二種見がある。かかる二見は中道とはいえない。無常無断が中道である、」と説かれてはいるが、これ、如何に中道が仏性になるといったことではなからうか。

不空をなくすこと（除不空）は、常辺を離れるのであり、空をなくすこと（除於空）は断辺を離れるのである。「智も不智も見ないこと」も同じである。故に中道が仏性になる。

そこで、經文に「仏性者は一切諸仏が得られた阿耨多羅三藐三菩提の中道種子である」と説いた。

従つて、いま「第一義空」を仏性と名付ける。空も不空もみず、智も不智もみない無常無断を中道と名付ける。

ただ、これを以て中道仏性になる。<sup>(57)</sup>

是の如く、一師（僧朗大師）以後の三論家が伝統的に経証としている『涅槃經』師子吼菩薩品の教説を通して、すなわち師子吼菩薩の質問に対する仏性の答弁を通じて、吉蔵は「第一義空」を仏性といったり、「無常無断の中道が仏性になる」と主張していることが分かる。

ここにおいても、彼は三論学のみが持つ独特な弁証論理を駆使して、縁起・無我・中道の仏教根本真理に契合される仏性を求めていることが窺える。換言すれば、上述の経文の「仏性者名第一義空であり、第一義空名為智慧である」という教説に言及される「第一義空」と「智慧」について、彼は今家（三論家）の説が従前の学説（由来義）とは異なることを強調し、従前説を論評排撃する立場から、縁起・無我の精神に違背されない仏性を解明しているのがみえる。

従前の学説においては、「第一義空」をただ認識対象の境界であるとのみ扱って、認識主観の「智慧」と何等の連関関係がないために偏道にすぎなく、さらに「智慧」についても「境界」と連関しないものと把握したので一方に傾いた偏道であり、「中道」ということはできないと論評して、吉蔵は今家説が従前の由来義と異なると強調している。<sup>(58)</sup>

従つて、彼は従前の諸説から曾て見られなかった「三論学の特種論理」すなわち主観（智・観）と客観（境・縁）等の如く、すべて対立的・相対的な状況と概念等を「境称於智して、智称於境する」とか、「縁尽於観になり、観尽於縁になる」と頻繁に説明するように、相互に関連させて把握説明する縁起無我の「因縁相待義」の論理によって明らかにされる正法、中道の眞理性を眞正な仏性になると主張したのが分る。<sup>(59)</sup>

そこで、彼は「中道」の内容も難しくて二諦を通して弁証されると明示しているので、吉蔵は一師以後（摂嶺相承）の

三論学において真俗二諦説に依り特殊論理を以て弁証する絶対真理性、すなわち「三種中道」<sup>⑥</sup>（俗諦中道・真諦中道・非真非俗の二諦合明中道）を成仏せしめる真正な要因になると主張せんとしたことも我々は知ることができる。

## V 結 語

嘉祥大師吉藏は、大乘仏教の深奥な教義を論議した『大乘玄論』の巻第三「仏性義十門」の中において、「中道」が成仏せしめる真正な要因になるという「中道為正因仏性論」を展開しているので、これを考察してきた結果、次の如く三つにまとめることができた。

第一に、吉藏は『涅槃經』伝来以後から当時まで多様に論議されていた諸仏性説の中で特徴のみえる十一家説を選び出し、その各々を個別的に論難批判している。

すなわち十一家説では、①衆生、②六法、③心、④冥伝不朽、⑤避苦求楽、⑥真神、⑦阿黎耶識自性清浄心、⑧当果、⑨得仏之理、⑩真諦、⑪第一義空などを正因仏性であると考えているが、「①は無我に悖る顛倒妄想であり、②は『涅槃經』迦葉品の教説内容を間違えて理解したのであり、③の心そのものは仏性と説かずに、むしろ無常と説かれた」といい、さらに「④⑥⑦は心家（⑧）の体用説と真偽説にすぎず、みな正しい正因説にならない、⑧は始有義であり、作法であるから正因ではなく、⑨は経説と受学が確かでないし、⑩も同じであり、⑪については経文には空ではなく中道が仏性になると説かれる」と、彼は個別的に批判論難しているのが分かった。

さらに、彼は上述の十一家説を「得仏之理」に一括して、これが有・無として思惟判断されず、判定されるにしても有無の二辺に偏墮し、真理性にならないことを指摘する「作有無破（第一重破）」と、過現末の三時中のいずれにも存在して作用せざるを批判する「作三時破（第二重破）」、および大乘空思想と同一もしくは相異もせずので正因といえ

ないと批判する「作即離破(第三重破)」など、三重破を以て論難批判していることが窺える。

是の如く、十一家の仏性説を個別的・総括的に批判論難した内容から、吉蔵は仏陀教説の根本真理性すなわち二辺遠離の「聖中道」において仏性を見出そうとした点(第十一家批判と第一重破)を知ることができ、さらに「中論」観去来品、所顯の「不来不去の論理」が駆使され(第二重破)、大乘空思想と契合される仏性を正因仏性とせんと(第三重破)した特徴がみえる。

第二に、彼は上述の十一家の仏性説を「対他」と「望道」との両面(横論一重・豎論一重)から論議する「横豎両重論」を展開して非真非俗の「中道」と、言亡慮絶の「真理性」に成仏の真正な要因である「正因仏性」を求めているのが分かり、また『涅槃經』師子吼菩薩品の教説一部内容の因・因因・果・果果の四句を無限廻轉の軌道上にあげておき、検討(無始終検・作者輪明義)して、その四句を三世の範圍の中で検討(有始終検・作三世明義)する「無始終・有始終の兩種検」を通して、非因非果の「中道」こそ正因仏性といえると主張したことが明らかにされた。

「対他」して以藥治病するという立場から横(平面)的に論議した「横論一重」においては、十一家説を否定した反対内容すなわち非衆生・非六法・非真諦・非俗諦などから正因仏性を求めて、結局は「非真非俗の中道」こそ正因仏性になるといえることを主張したので、横破八迷する「中論」八不偈の「破邪」と「超百非」の精神がこめられており、二辺を遠離する中道に契合した主張が成り立っているといえる。さらに「望道」の立場から十一家説一つ一つを深く縦(豎・垂直)的に考察した「豎論一重」においても、有・無・亦有亦無・非有非無などの四句思惟を超絶した言亡慮絶の絶対真理性に正因仏性を見出そうとし、豎窮五句にして絶四句する「顯正」の姿勢が発揮されたといえる。

さらに『涅槃經』師子吼菩薩品の仏性に関する教説内容一部にみえる四句(十二因縁の因、觀智の因因、三菩提の果、大

涅槃の因果」について、その始終を制定せずに検討した「無始終検」では如何に検討しても無限回轉を反復する因と果のみであるから、かかる四句の因果は傍因・傍果にすぎなく、新しい第五句の「非因非果」こそ正因になると主張している。非因非果の中道に正因仏性を求めていることがはっきりしてくる。

また前述の四句を、その始発と進行および終末の三世に限定して検討した「有始終検」においては、相互異質的な因と果と亦因亦果の三句のみであるが、かかる三句ではない「非因非果」こそが正因になるといい、この三句に新たな第四句が備わってこそ正因になると主張しているので、やはり因・果の二辺を越える中道が正因仏性になることを主張したことが示された。

第三に、吉蔵が「中道が正因仏性になる」と主張できうる根拠が明らかになった。彼は一師（僧朗大師）以後の三論家が正しく考えて伝統的に経証としている『涅槃經』師子吼菩薩品の教説、すなわち「云何為仏性 以何義故名仏性」等のような五つの質問に対する如来の答弁内容に基づいていることを明かしたのである。

「仏性を第一義空と名付け、第一義空を智慧と名付く……所謂、空といわれるものは空も不空もみえず……常見と断見は中道とはいえず、無常無断が中道である。……仏性というものは一切諸仏が成し遂げた阿耨多羅三藐三菩提の中道種子である、」等のように説かれた内容を従前の解釈（由来義）とは異なり、「境称於智し、智称於境する」とか「縁尽於観になり、観尽於縁になる」という「因縁相待義」に基づいて第一義空（境）と智慧（智）を相互関連させて解釈したり、「空」そのものについても空と不空を選ばず、「智」についても智と不智とに分けずしてこそ二辺を遠離した聖中道になると説明し、また無常無断の中道が仏性になるといい、この中道は二諦を通して明らかにされるものと言及しているから、吉蔵は「縁起・無我・中道」という仏教根本教義と「一切皆空」という大乘精神に符合一致する真理性に「仏性」の本質を解明せんとしたことが分かる。さらに「中道」も真俗二諦を越える「非真非俗」の「二諦



合明の中道」等を弁証する三論学特有の「三種中道」こそ、一切衆生を成仏せしめる真正な要因である「正因仏性」になれると主張しているのが明らかになった。

# 註

- (1) 大正蔵・十二・七七五・中
- (2) 同上・十二・五二二・下など所説。
- (3) ①日本、元曉述、『涅槃宗要』（大正蔵・三八・二四九・上）には、  
「第二師云 現有衆生為仏性体……如師子吼中言 衆生仏性亦二種因者 謂諸衆生也 莊嚴寺是（曼）法師義也」  
②日本慧均の『四論玄義』巻七、仏性義の第三論体相（新纂、大日本統蔵経・四六・六〇一・下）には「第七河西道朗法師末  
莊嚴曼法師 招提白珍公等云 衆生為正因体……故謂衆生為正因是得仏之本……」  
(4) 経云 花菩薩有我相人相衆生相則非菩薩……寧得以衆生為正因耶、……故知衆生与仏性有異 不得言衆生是仏性也（大正蔵・四五・三六・上）
- (5) 『四論玄義』巻七、仏性義の「第三論体相」（新編、上掲蔵・四六・六〇一・下）
- (6) 又難第二家 経云 仏性者 不即六法 不離六法者 言此是何語而横引之此文 乃明仏性 非是即六法 復非是離六法 何時明六法是仏性耶。（大正蔵・四五・三六・上）
- (7) 『正統蔵経』第九七冊、（台灣、新文豐分版公司 発行）五九〇頁。
- (8) 吉蔵 撰『中観論疏』巻六本（大正蔵四二・九二・上）
- (9) 経云 有心必得菩提者 此明有心者必得菩提……心は無常 仏性は常 故心非性也（大正蔵・四五・三六・中）
- (10) 鎌田茂雄著『中国仏教思想史研究』（東京、春秋社、一九七〇）十九頁参照。  
宇井伯寿氏は『国訳一切経』（東京、大東分版社、一九八一）諸宗部1の一四七頁にて、中寺小安法師を慧安法師と推定している。

- (11) 常盤大定著『仏性の研究』（東京、丙午出版社、一九三〇）一八四頁。
- (12) 心既不成 心家諸用 冥即不朽 避苦求楽等 悉皆同壞也……何処文辨冥伝不朽等、為正因仏性也。（大正蔵・四五・三六

・中

- (13) ①吉藏撰、『勝鬘宝窟』卷下末（大正藏・三七・八三・中）の「靈味淳師云 是理知厭苦求樂……為正因仏性 由之得仏 平時猶有光宅師 以厭苦求樂為正因」
- ②『四論玄義』卷七「仏性義」（新纂 上掲、六〇一頁・中）の「第六光宅雲法師云 心有避苦求樂性義為正因仏性」
- (14) 此正明由如来蔵仏性力故……何時明厭苦求樂是正因仏性耶。（大正藏・四五・三六・中）
- (15) 第四梁武蕭天子義 心有不失之性 真神為正因体……因中已有真神性故 能得真仏果『四論玄義』卷七、仏性義、新纂 上掲、六〇一頁・中
- (16) 元曉撰『涅槃經遊意』（大正藏・三八・二三七・下）に「第一靈味高高 生死之中 已有真神之法……有得天眼者 提淨法 則金像宛然 真神亦爾」と言及されたものに基ついた。「靈味高高」は『梁高僧伝』卷八に収録された靈味寺の宝亮に対する 誤記であると指摘（鎌田茂雄、上掲書、二十頁）されている。
- (17) 『四論玄義』（新纂 上掲、六〇一―六〇二）に「第九地論師云 第八無没識為正因体 第十摂論師云 第九無垢識為正因体 故彼両師云 從至仏同以自性清淨心為正因仏性体」と論述されていることに基ついた。
- (18) 撰大乘論云 是無明母 生死根本……皆是有所得五眼所不見（大正藏・四五・三六・中）
- (19) 元曉撰、『涅槃宗要』（大正藏・三八・二四九・上）に「第一師云 当有仏果為仏性……故修万行 以剋現果……故説当果而 為正因 此是白馬寺變法師述生公義也」と説かれたのに基づく。
- (20) 当果為正因仏性 此是古旧諸師多用此義 此是始有義 若是始有 即是作法 作法無常 非仏性也（大正藏・四五・三六・下）
- (21) 此是靈根僧正新用 然闕無師資相伝……豈非背師自作推画耶。（大正藏・四五・三六・下）
- (22) 和法師は誰なのか確かではないが、小亮法師は『高僧伝』を調べた結果、靈味寺の宝亮に違いないと断定している。（鎌田茂雄、上掲書、二二頁）
- (23) 常盤大定、上掲書、一八六頁
- (24) 宇井伯寿訳『大乘玄論』仏性義（国訳一切経、諸宗部Ⅰ、七六頁）
- (25) 今問 若依涅槃文 以第一義空為仏性者 下文即言 空者 不見空与不空 名為仏性 故知 以中道為仏性 不以空為仏性

也。(大正藏・四五・三六・下)

(26) 常盤大定 上掲書、一一九頁)

(27) 大略言有十一家……然十一家 大明不分三義(大正藏・四五・三五・下)

(28) 通論十一家、皆計得仏之理、今總破得仏之理、義通十一解、事既広、宜作三重破之(大正藏・四五・三六・下)

(29) 第一家以衆生為正因 第二家以六法為正因 此之兩釈不分仮実二義 明衆生而是仮人 六法即是五陰及仮人也、(大正藏・四五・三五下—三六上)

(30) 次以心為正因 及冥伝不朽避苦求楽 及以真神 阿黎耶識 此之五解 雖復体用真偽不同 並以心識為正因也。(大正藏・四五・三六・上)

(31) 次有三四家 並以理為正因仏性 而不無小異 前之兩家以当果与得仏之理為正因仏性者 彼言是世諦之理 次有兩家以真諦与第一義空為正因仏性者 此是真諦之理也。(大正藏・四五・三六・中下)

(32) 第一作有無破 只問 得仏之理 為当此理 為当是無 若言是有 有已成事非謂為理 若言是無 無即是無 即隨二辺 不得言理也。(大正藏・四五・三六下)

(33) 大正藏・四五・三六・下。

(34) 大正藏・四五・三六下—三七上。

(35) 此三条推求不可得 非四家義壞 通十一計皆碎也。(大正藏・四五・三七・上)

(36) 吉藏撰『中觀論疏』卷一に、「今二十七品 横破八迷 豎窮五句 以求彼生滅不得故云不生不滅……五句自崩……故此論一部 横破八迷 豎窮五句 洗顛倒之病」と説明されている。(大正藏・四二・一〇・下)

(37) 前は横論一重 此復是豎論一重 便成兩重論正因義也。(大正藏・四五・三七・上)

(38) 問 破他可爾 今時何者為正因耶。

答 一往对他則須併反 彼悉言有 今則皆無 彼以衆生為正因 今以非衆生為正因……今以非真諦為正因……今以非俗諦為正因故云非真非俗中道為正因 仏性也以藥治疾則須此說对他、雖爾、(大正藏・四五・三七・上)

(39) 大正藏・四五・三七・上)

(40) 『中論』觀法品 第十八(大正藏・三〇・二三下—二四上)

の次の二偈頌参照。

諸仏或説我 或説於無我 諸法実相中 無我無非我 (第六偈)

諸法実相者 心行言語斷 無生亦無滅 寂滅如涅槃 (第七偈)

(41) 仏性義、十門中、会教、第九(大正藏・四五・四二・中)においても、「若悟諸法平等無二無是非者 十一家所説並得正因仏性」といつて同じ趣旨の主張がみえる。

(42) 北本(大正藏・十二・五二四・上)および南本(大正藏・十二・七六八・中)

(43) 但正因難識 今作兩種檢之一作車輪明義 無始終檢 二作三世明義 有始終檢也。(大正藏・四五・三七・下)

(44) 是以無始終義 作四句明之 所言因者即是境界因 謂十二縁也……所言果果即是大般涅槃由菩提故(大正藏・四五・三七・下)

(45) 大正藏・四五・三七下—三八上

(46) 所言「因因」者 即是「縁因」 謂十二因縁所生「觀智」 因「因」而有故名「因因」(大正藏・四五・三七・下)

(47) 所言「因」者 即是境界因 謂十二因縁也……所言「因因」者……所言「果」者……所言「果果」者 即是大般涅槃 由菩提故 得説涅槃以為果果 菩提即是智 涅槃即是斷 由智故説斷也 此是無始終義。(大正藏・四五・三七・下)

(48) 十二因縁 亦因「因」而有 又是「因因」既五為「因」与「因因」故是無始終也。(同上藏 同上)

(49) 前四句所明因果 因是傍因 果是傍果義……皆未是正因 若言非因非果 方是正因耳。……故經云 非因非果名為仏性也。故於四句中更足第五句 方是正因。(大正藏・四五・三八・上)

(50) 因則異果 果則異因 豈非是傍義(大正藏・四五・三八・上)

(51) ①然先言正因仏性 非因而因故有二因謂境了二因 非果而果故有二果 謂菩提与涅槃……所以此二因二果 並是傍因傍果 若非因非果乃是正因。(同上)

(52) 然此四種兩因兩果 並皆是傍 不得名正……不因故有因 不果故有二果 所以此因是不因 此果是不果故 非因非果乃名正因。(同藏・四五・三九・上)

(53) 後説三句 是因非果 是果非因 是因是果 皆未正因 若言非因非果 此乃正因 故終云 非因非果名為仏性……於三句中更足第四句 方是正因。(大正藏・四五・三八・上)

(54) 今時「一師」、毎以涅槃經為証(大正藏・四五・三七・中)ここで「一師」は高句麗の遼東分身僧朗大師をさす。「學問之體」は要須依師承習」という姿勢を以て、去藏はいつも「一師」以後の學風を「撰嶺興皇相伝」と強調しているのが、彼の著書の到處にみえる。(一九八四年、韓國精神文化研究院発行「哲學思想の諸問題Ⅱ—韓國哲學の根源探究」に拙論「僧朗の三論思想」参照。

(55) ①故一師所引文句 以師子吼文為正(大正藏・四五・三七・中)

②一家相伝云 從多約終時之涅槃 上軌正斥昔明義為宗 未得任道論仏性 中下兩軌正明仏性也。師子吼品第二十五卷具明仏性體(四論玄義)上揭藏、六〇九上—下)

(56) 南・北本『涅槃經』師子吼菩薩品に共に「云何為仏性 以何義故名仏性 何故復名常樂我淨」等のような「八何」の質問が「提起(大正藏・十二・五二三および七六七・中)され、これに対する答弁がされている。(同上・五二三中—五二四上および七六七下—七六八中)

(57) 故師子吼菩薩問言 云何為仏性 以何義故名仏性 如是凡有五問仏性 如來次第答……只以此為中道仏性也。(大正藏・四五・三七・中)

(58) 大正藏・四五・三七中—下)

(59) 彼明第一義空 但境而非智 斯是偏道……彼明智慧 但智而非境 斯亦是偏道義 非謂中道也。(同上)

(60) 第一義空為仏性者 非是由來所辯第一義空……今言智慧 亦非由來所明之智慧(同上)

(61) ①境と智の關係性が「因緣境智」と糾明され、「故境稱於智 智稱於境 境名智境 智名境智」等と説明される。『大乘玄論』卷第四、二智義の論境智門、第四、大正藏・四五・五五中—下)

②『三論玄義』の別釈中論名題門においても「緣尽於觀 觀尽於緣」等と表現されている。(大正藏・四五・十四・上)但中道義難識 具如二諦中辯(大正藏・四五・三七・下)

(63) 三種中道に關しては、

①隋の吉藏撰『大乘玄論』卷第二の「第二明三種中道」(大正藏・四五・二七中—二九上)

②同上、「二諦義」卷下の「明二諦體第四」(大正藏・四五・一〇八上)

③同上、『中觀論疏』卷第一の「因緣品第二」(大正藏・四二・一〇下—十二中)等に詳しく説かれている。